バッハの世俗カンタータとギリシア神話

小川与半・著

西欧の芸術文化を理解する上で必要な知識として、まず聖書、次に西欧神話が挙げられます。バッハの教会カンタータは聖書とキリスト教の教義の集約ですが、一方世俗カンタータには西欧神話を題材とするものが幾つかあるので、ここでご紹介します。

カンタータ第201番/急げ、渦巻く風ども
Geschwinde, ihr wirbelnden Winde/BWV201

成立は1729年頃、演奏目的は不明、この年バッハはライプツィヒの学生を中心とした演奏団体コレギウム・ムジクムの指導を始めたそうです。バッハ作品の作詞者でおなじみのピカンダーは、紀元前ローマの詩人オヴィディウス作のギリシア神話集「メタモルフォーゼス(変身物語または転身物語)」の中のアポロンとパンの音楽勝負を元に台本を作成したようです。原話ではパンが笛を吹き、アポロンが竪琴(キタラ)を奏し、トモルスがアポロンの勝利を告げたが、ミダスはそれを不服としてパンの音楽を支持したため、アポロンの怒りを買ってロバの耳に変えられたという、今日の感覚ではパワーハラスメント的な理不尽なものです。登場人(神)物ごとに少し詳しく説明を加えます。

フェーブス　ポイボスのドイツ式発音でアポロンの別名、あるいは称号とのことです。太陽の神、音楽の神として知られ、色々な物語が知られていますが、ここでは本カンタータ第５曲アリアに関する話をご紹介します。アポロンと西風の神ゼピュロス(カンタータ第205番に登場)の２人はスパルタの王子ヒュアキントスに恋(同性愛)をしましたが、ヒュアキントスはアポロンを選び、ゼピュロスはそれに嫉妬しました。ある日、アポロンとヒュアキントスの２人が円盤投げで遊んでいる時、アポロンが投げた円盤を、ゼピュロスが風を起こして方向を変えたため、ヒュアキントスの頭に激突、彼は死んでしまいました。その時彼の頭から溢れ出た血から赤い花が咲いたので、この花は彼の名にちなんでヒュアキントス(今日のヒアシンス？)と呼ばれたそうです。

パン　羊飼いと羊の群れを監視する神で、四足獣のような臀部と脚部で、頭に角を持ちます。今日では牧神・自然神の総称となり、ディズニー長編アニメにもなった「ピーター・パン」の名前の由来にも関係ありそうです。パンが歌う第７曲アリアはのちに農民カンタータBWV212第20曲アリアに転用されました。パンはカンタータ第208番にも登場します。

ミダス　ある地方の王様で、いささかドジな役割を与えられています。触ったもの全てを黄金に変える能力を望んで授かり、手にする食べ物飲み物まで全て黄金に変わって危うく餓死しそうになったり、本カンタータの元になる話でロバの耳を与えられたり(「王様の耳はロバの耳」の話がこれに続きます)、しかしその後改心したため普通の耳に戻してもらえたそうです。ミダスがパンを称える第11曲アリアの中間部の「私の両耳には」という言葉の部分で、ヴァイオリン斉奏がロバの鳴き声を模写するのがとてもユーモラスです。

メルクリウス　ヘルメス(英語名マーキュリー)、伝令、盗賊、職人の庇護者と言われてますが、その名の merces(商品、財貨)から商業の神というのが最も知られています。カンタータ第213番にも登場します。

トモルス　山の神で、この音楽合戦の審判を務めた、と言うことまでしかわかりません。

モムス　これで検索すると「モー娘。(モーニング娘。)？」と出て来ますが、ギリシア神話に登場するモモス、非難や皮肉を擬人化した神、ということなら、本カンタータの内容とも一致します。

カンタータ第205番/破れ、砕け、壊て(鎮まれるアイオロス)
Zerreißet, zersprenget, zertrümmert (Der zufriedengestellte Aeolus)/BWV205

1725年８月３日、ライプツィヒ大学のミュラー教授の聖名祝賀会で演奏されました。トランペット３、ティンパニ、ホルン２が１曲の中で同時に必要なほどの大編成は、現存するバッハの作品中では他に見当たりません。
「アイオロス(ドイツ語発音では「エーオルス」)」で調べると他の別の人物の説明も出て来ますが、ホメーロスの叙事詩「オデュッセイア」ではアイオロスを風の神と紹介しています。本カンタータで歌われる話の由来は不明で、作詞者ピカンダーの創作かもしれません。本カンタータでの筋書きは、全てを破壊しようとするアイオロスの怒りを、ゼピュロス、ポモナ、パラスの３神が鎮める、というものです。

アイオロス　風の神たちの主。英雄オデュッセウスの航海に協力するためゼピュロスを革袋に詰めて与えたとか、洞窟に閉じ込められた風たちを解き放って船隊を沈めたなどの物語があります。本カンタータの台本は後者の方が関連がありそうです。

ゼピュロス　アイオロスの下には北風ボレアース、南風ノトス、東風エウロス、そして西風ゼピュロスの４風神がいて、特にボレアースとゼピュロスに関する物語が多く残っています。ゼピュロスの物語で最も有名なのは、カンタータ第201番の項でご紹介したアポロンとヒアキュントスが登場する話ですが、ゼピュロスは４風神の中では最も温和で、春の訪れを告げる豊穣の風とのことです(なんか矛盾)。

ポモナ　ローマ神話に登場する、果物とその栽培を司る女神です。

パラス　知恵、芸術、工芸、戦略を司るギリシア神話の女神アテナ。少女の頃一緒に遊んでいた友達を誤って死なせてしまったことを悲しみ、その友達の名をもらってパラス・アテナと名乗ったそうです。特に有名なのはペルセウスのメドゥーサ退治の時に、ペルセウスに鏡の盾を貸した話かもしれません。カンタータ第214番にも登場します。

カンタータ第208番/楽しき狩こそ我が悦び(狩のカンタータ)
Was mir behagt, ist nur muntre Jagd! (Jagdkantate)/BWV208

初演1712-13年、ヴァイマール時代の作品です。ザクセン・ヴァイセンフェルス公クリスティアンの誕生祝い用と推定されています。神話の登場人物の名を借りてはいますが、クリスティアン公が狩好きのためにこのような台本が作られたようで、古代神話の逸話に由来するものではなさそうです。

ディアナ　ローマ神話に登場する、狩猟と貞節と月の女神。ギリシア神話の狩猟・貞潔の女神アルテミス、同神話の月の女神セレネと同一視されます。

エンデュミオン　ギリシア神話に登場する人物で、前述の女神セレネに愛された物語が伝わるため、ディアナとエンデュミオンの２人が中心のこの台本が出来たようです。

パン　本カンタータでは牧神としてクリスティアン公を称える言葉を歌います。

パレス　ローマ神話の牧畜の女神、クリスティアン公を称える言葉を歌います。パレスが歌う第９曲アリアは本カンタータ中最も有名で、歌唱抜きの編曲も幾つか録音があります。日本のバロック音楽ファンの間では、NHK-FMで朝６時から約１時間放送された「朝のバロック」のオープニングに、器楽編曲版(確かパイヤール室内管弦楽団の演奏)が使用されたことで更に有名になりました。

カンタータ第213番/われら心を配り、しかと見守らん(岐路に立つヘラクレス)
Laßt uns sorgen, laßt uns wachen (Hercules auf dem Scheidewege)/BWV213

初演1733年９月５日、ザクセン皇太子フリードリヒの11歳の誕生祝賀のために作られました。ギリシア神話の中で最も有名な英雄：ヘラクレスにまつわる話は非常に多いのですが、本カンタータで歌われる話は絵画にも多く描かれていて、紀元前５世紀のプロディコスが伝える「ヘラクレスの選択」が元になっています。まだ若い(本カンタータでは少年)ヘラクレスが、とある分かれ道で、甘い生活に誘惑する女性(快楽：ソプラノ)と、苦しいが得と名誉のある生活を勧める女性(美徳：テノール)に会い、迷った末に美徳を選ぶ、と言う話です。
＊「クリスマス・オラトリオ（BWV248)」に合唱序曲とアリア全５曲が転用されました。

ヘラクレス　ゼウスとアルクメネ(ペルセウスの孫)の子ですが、ゼウスの正妻ヘラがこれを嫉妬し、ヘラクレスに対して様々な(今日で言う)いじめを行います。その中のひとつが第９曲アリア中間部で歌われる話で、まだ赤子のヘラクレスを殺そうとヘラが二匹の毒ヘビを送ったのですが、ヘラクレスは蛇を素手で絞め殺した(本カンタータでは踏み砕いた)というものです。
＊本カンタータで出会う快楽と美徳の神話上の名は不明です。

エコー　森のニンフ(聖霊、下級女神)。諸説あるようですが、ゼウスの浮気の手伝いをしたためヘラ(ゼウスの正妻)の怒りをかい、他人の呼びかけ言葉を繰り返すのみを許されたのが由来とされています。ナルキッソス(「ナルシスト(自己愛者)」の語源となる美少年)との逸話が有名です。

メルクリウス　ここでは商業都市ライプツィヒの象徴として登場します。

カンタータ第214番/太鼓よ轟け、ラッパよ響け
Tönet, ihr Pauken! Erschallet, Trompeten!/BWV214

初演1733年12月８日、ザクセン選帝侯のお妃マリア・ヨゼファ誕生祝いのために作られました。特に神話にまつわる逸話からの引用は無いようです。
＊「クリスマス・オラトリオ（BWV248)」に合唱２曲とアリア２曲が転用されました。

ベローナ　ローマ神話の戦争の女神。軍神マールス(火星:Marsの名の元)の妻で手に松明と武器を持ちマールスの乗る戦車を操縦するそうです。

パラス　文芸の神ミューズ(ムーサ)を褒め称える役割で登場します。

ファーマ　噂話を吹き出す女神ですが、この曲ではバスが担当します。

以上、とにかく昔の人の聖書と神話の知識には感心しますが、考えてみると当時はまだテレビ・ラジオなどの娯楽手段も無く、本も聖書関連中心(グーテンベルクの活字印刷発明が1450年頃、紙もまだ貴重)で、しかも字も読めない人が多かったであろうことを考えると、毎日曜日に教会で教わる聖書の話と、神話で伝えられる物語しか楽しみが無かったのでは、とも考えられます。
//